



知床半島が日本で一番新しい国立公園として誕生したのは、昭和三十九年六月であった。国立公園の指定が遅れた原因は、僻遠の地に位置するため、多くの人々の目に触れる機会がなかったこと、公園の利用がきわめて少なかったこと、景観的に卓越しているとは評価されなかったこと、などが考えられる。

しかし、脊稜をなす山々は深い原生林に覆われ、海へ落下する滝を連続させた断崖とともに、見る者を畏怖させずにはおかぬような、日本では稀少な原始的自然を、知床半島は保ちつづけていたのである。

昭和三十七年にはじまる高度成長政策により、地域開発や産業開発（観光開発もふくむ）の圧力、所得や余暇の増大がもたらす戸外レクリエーション需要の圧力が、既存の国立公園に津波のようにおしよせた結果、国立公園の存在理由である自然は破壊され、人間と自然とのダイナミックな交流は妨げられるようになってしまった。反面、国土保全・学術上・レクリエーション需要・公害防止等々の立場から、自然、それも原始的な自然を保護しなければならぬという要請も、国民各層から湧きおこってきたのである。

従来、自然景観の卓越性と利用性をより重視していた自然公園行政が、あえて知床

半島を国立公園に指定したのは、国民各層の要請に応え、将来の世代に原始的自然を残してやらねばならないという、自然保護をより重視した姿勢を示すもので、自然公園行政におけるひとつのターニングポイントと見なすことができよう。

◇◇◇

公園計画の基本方針でも明らかのように知床国立公園は、原始的自然の保護を至上命題としているのである。

さて、指定以来五周年を経た今日、自然保護を至上命題とする知床においても、いろいろな自然破壊が目立ちはじめている。

その第一は、産業開発、それも道路・港湾など大規模な土木工事を伴う、いわゆる公共事業による直接的破壊である。現在施行されているものは、道路三本（知床関連林道・ウトロ羅臼線道路・羅臼相泊線道路）と港湾一カ所（知床岬）であり、将来、予想されるものに道路一本（ルシャール線）と港湾一カ所（相泊）がある。

これらは、いずれも国の行政機関により執行されているもので、地域開発の立場から要請されていることは理解に難くないが、どれをとってみても原始的自然に、荒

々しい醜悪な傷を残すものであることは否定できないし、法面の緑化工が完全に施さ

れるにしても、外来種の吹き付けなどでごまかせるものではない。

また、知床半島ほとんど全域に鉱区が設定されており、大部分は採算ベースに合わない褐鉄鉱のため操業はされていないが、有望鉱が発見された場合、よほど強力な調整がなければ、知床の自然は見るかげもなく収奪されてしまうであろう。

第二の問題は、他の国立公園が同じようにかかえている悩み、すなわち、利用者の急増による高山植物などの踏圧や被圧、利用拠点におけるゴミの散乱である。

指定当時二〇万人に満たなかった利用者が、現在では五〇万人を越えるにいたっている。そのため、羅臼岳や硫黄山などの高山植物地帯では、登山や幕営による踏圧・被圧の損傷が目立ち、また、知床五湖や羅臼温泉・羅臼平などにおいては、ゴミの処理が大きな問題になってきている。知床五湖や羅臼温泉の場合、地元町がわずかながら予算を計上し、随時清掃を実施しているが完全とはいえない。羅臼平をはじめとする山岳地帯にあつては、体制的にも不可能であり、そのため一層安易なゴミ投棄が行なわれる状態を現出している。

このほか、植木マニヤや業者による被害

知床国立公園指定の意味

も決して見逃しにはできない。シーズンオフのある日、羅臼平附近でコケモモ・ガンコウラン・キバナシヤクナゲ等々、大量の高山植物を隠そうとした二人連れは、盗採を目的に札幌から自動車できたというものであった。また、一般利用者の行かない海岸の番屋をまわって歩くと、シンパクなどの盗採品がしばしば発見されるし、最も顕著な例には、知床岬におけるガンコウランの被害がある。われわれや国有林当局が取り締りにやっきになっているにもかかわらず、夜の闇にまぎれ、自動車を使つて搬出する者も後を絶たない。現在、工事中のウトロノ羅臼線が開通したら、その被害はさらに飛躍的に増大することであろう。

はるばる内地から訪れた若いツーリストたちは、粗末な宿や不便な交通機関に不満を洩らしながらも、知床に対してはだいたい満足して帰る。何が彼らを満足させるのだろうか。連続する断崖だろうか。知床連山の雄姿だろうか。知床五湖のたたずまいだろうか。それらもひとつの魅力ではあろうが、もっとも大きな要素は、知床の持つ原始性である。原始的自然をなくして知床の魅力はない。連続する断崖、それは陸中海岸や隠岐島にも見られるものだ。知床連山を中部山岳に比するまでもあるまい。知床五湖が、裏磐梯の五色沼より魅力があると

はとうていいいえない。景観的には多少劣るとしても、若い彼らを満足させるものは、原始的自然と彼らとのダイナミックな交感の存在である。

いわゆる先進観光地と呼ばれる他の国立公園、その景観は確かに優れているけれども、過剰開発と過剰利用、利用者と自然の間に介入する観光業者によって、自然と人間との直接的交流はさきざき行われている。そこにあき足りない彼らにとつて、ここ知床は魅力あふれる自然の故郷なのである。自然と人間との原初の触れ合いを感じさせる知床の環境は、感受性の豊かな彼らの魂に清新な息吹きと感懐を植えつけずにはおかないのだ。

知床の自然を、このまま永久に残して欲しい、人の手で傷つけるようなことはしないで欲しい、俗化させないで欲しい、と彼らは口を揃えて訴える。

原始的自然が残されているということは森林資源・地下資源などの天然資源が未開発のまま残されていることを意味する。これらの天然資源を開発し利用しようとすることは、経済的に具体的数値として算定し得ることであり、採算さえ合えば、きわめて当然と肯かれることである。それに対して、自然をそのまま保存することは、現在の経済学では算定し得ない。そのため、保

護と開発との数値的比較がなされず、安易な開発が行なわれる傾向が強い。しかし、すでに述べたように、近年のめざましい産業の発展は、日本からどんどん原始的自然を消滅させ、現在なお急速度に浸蝕しつつある。反面、国民生活に不可欠となった原始的自然を対象とするレクリエーションの需要も急激に増大している。

◇◇◇

知床半島が国立公園に指定されたということは、産業開発を抑制し、日本では他に見られない原始的自然を保護してゆこうという、国民的要請に応えたものというべきであり、中央・地方を問わず、各行政機関がひとつの合意点に達したものであることを意味する。むろん、地域開発を否定するものではないが、開発にあたっては、この合意点の意味を正しく理解し、全国的視野から慎重に行なわれるべきであろう。それが、つぎの世代に対する行政の責任であるといえよう。

それとともに、じゅうぶんな予算措置と積極的な体制作りにより、俗化や利用破壊を防止し、利用者自身もまた謙虚に自然に接し、知床の原始的自然を、日本における自然宗のメッカとして、将来の子々孫々にいたるまで永久に保存してゆきたいものである。

(知床国立公園・管理員)